

プラクシオロジーと政治経済学

飯 尾 要

I

オスカー・ランゲがその著書『政治経済学・I』（1959年）でプラクシオロジー（praxeologia; praxiology）について述べたところから、ポーランドでは、プラクシオロジーが重視されるようになった。1962年には、ポーランド科学アカデミーは第1回プラクシオロジー会議を開いたし、またその年から雑誌 *Materialy Praxeologiczne*（プラクシオロジー資料；のちに *Praxeologia* に改題）も出るようになった。ところで、ポーランドで、プラクシオロジーということばを科学的タームとして打ち出したのは、ポーランド分析哲学者の1人コタルbinski（Tadeusz Kotarbinski）である。その、プラクシオロジーに関する代表作は、すこしさかのぼって1955年に著わされた『有効な仕事についての研究』である。Lange [L-1], Kotarbinski [K-4].

ちかごろ、わが国でも、ランゲの理論をはじめとして東ヨーロッパにおける経済理論などをとりあげる際に、このプラクシオロジーについてしばしば言及されることが多い。

そこで、このエッセイでは、ポーランドにおけるプラクシオロジー展開についての思想的背景なども簡単にみながら、プラクシオロジーと政治経済学との関連についていささかの整理を行なっておきたい。

II

プラクシオロジーとはなにか。

今日、これについて普遍的にうけいれられている定義というほどのものは、まだない。

ほぼ一般に使われている意味内容でいうと、目的と手段の間の一般的連関を研究するもので、人間活動の方法論的合理性に立つ操作理論的研究といったものに近い。

具体的イメージとしては、今日、プラクシオロジーという特定の個別科学が生まれたというよりも、プログラミング論をふくむORの多くとか、ある種の技術哲学の一部分などが一群としてとらえられて、プラクシオロジーとみられていると、うけとった方がよいだろう。そして、これらは、人間または集団の活動の様式について、具体的・条件的な特質のうちいくつかを捨象して、抽象的に研究するものであり、その行為がどのような領域に属するか、つまり政治的行為であるか経済的行為であるか、あるいは恋愛のようなものであるかを問わない。また、そのアプローチは、人間の行為過程に内在する諸関係にたいして、一般に、論理学的＝数学的側面からアプローチする。これらのことからいうと、いわゆる対象科学と方法科学といった分類でいうなら、プラクシオロジーは方法科学に属する性格をもっている。

ところで、さきに述べたように、プラクシオロジーというタームは、今日、多くの場合には、一群の諸研究をなにか総称するような形で使われるか、あるいはもっとゆるやかな使用法では、それら一群の諸研究がもっているある特質的な傾向をプラクシオロジカルな特性として認識するという使用法もある。もちろん、これらとはちがって、プラクシオロジーを、ある一つの自己完結的な形をとる個別独立の科学部門として形づくろうとする努力もないではない。さきに述べたコタルビンスキの場合には、むしろこれに近いとみてよいだろう。

コタルビンスキは、プラクシオロジーを、`有効な行為の一般理論、

(the general theory of efficient action) を研究する新しい学問の一分野として設立する必要を主張し、`有効な行為の科学、(the science of efficient action) などとよんだ。コタルビンスキのプラクシオロジーの内容については、あとでまた触れるが、ひと言でいうと、目的、手段、効率、協業そのほかの、人間行為過程に内在する一般的カテゴリーについての相互関連や一定の諸関係抽象するという研究であり、広い意味での「技術論」、あるいは「技術哲学」のような形をとっている。ここでいう、広い意味での技術とは、人間行為に関して存在する、目的とそれを達成する諸手段およびその使用法の組み合わせということである。ただ、プラクシオロジーを個別科学ととろうと、また一群のヨリ広いものととろうと、いずれにせよ、コタルビンスキがプラクシオロジーについてつぎのようにいっていることは一般的に妥当する。

プラクシオロジーは、たとえば、目標のヒエラルヒーとか、目標と手段の関係とか、複雑な活動を組織する際の協同活動一般とかを研究し、最大の有効性を達成することを望んでいるあらゆる仕事にたいして設立つような示唆や警告といった意味での`仕事の技術、仕事のやり方、を提供するのがその目的である。このように、広い意味での技術的示唆を得るのが目的であるから、主要解は規範的 (normative) な性格をもつわけだが、その解を得るためには活動の過程を支配する一般的関連を分析的にみきわめようということになる。Kotarbinski [K-4] p. 1, [K-6] p. 304.

このプラクシオロジーというタームをほぼ上述と似た意味で使用した人は、かなり古くからあるようである。以下、主としてスコリモフスキの研究によりながら、すこし見よう。Skolimowski [S-1] pp. 116-8.

まず、1882年におけるルイ・ブルドウの著書では“praxeologie”なるタームが`行為の科学、という意味で使われている。Bourdeau [B-2].

このタームを使ってはいないが、似たような方向を明示したものとなると、いくらでもさかのぼれるかも知れない。19世紀の半ばあたり以降で

は、フランスのシャルル・デュノイの1845年の著書や、スペインのメリトン・マルティの1878年の著書などもあげられる。Dunoyer [D-1], Martin [M-1].

また、フランスの哲学者であり社会学者であるアルフレッド・エスピナの著書「技術学の起源」(1897年)もコタルビンスキのプラクシオロジーの先達とみられている。Espinass [E-1], Lange [L-1] p. 189, 邦訳 194 ページ。

注目すべきは、1911年にイギリスのチャールス・マーシャーによって書かれた『生物学的考察に立つ、行動およびその無秩序』の中で、行動に関して全体的かつ体系的な知識をもつことを、「プラクシオロジーの研究、とよんだことである。Mercier [M-2] p. vii.

このほか、コタルビンスキも、注目すべき先達として、ボグダーノフやペトロヴィッチ、スルッキの著書や論文をあげている。また、自分の研究と同時代的に並行している研究として、ミードやフォン・ミーゼスの著書や、またパーソンズなどにも触れている。Bogdanov [B-1], Petrovitch [P-2], Slucki [S-2], Mead [M-3], von Mises [M-4], Parsons and et. als. [P-1]

これらの流れの中で、コタルビンスキも1955年に、さきにあげたプラクシオロジーに関する代表著作を発表するわけであるが、それ以前にもコタルビンスキによる若干の研究は発表されている。1913年における『実践論 (Szkice praktyczne)』, 1925年における『実行の態度について (O stosunku spawstwa)』, 1934年における『行為論 (Czyn)』などがある。これらの研究論文はすべて『コタルビンスキ選集』第1巻に収められている。—— Kotarbinski [K-1].

コタルビンスキによる前記著作が1955年に発表されてのち、プラクシオロジーは、1950年の後半から60年代にかけて、ランゲや、また同じくポーランド科学アカデミーの計量経済学委員会に属しコタルビンスキの弟子で

あった**グレニエフスキ** (Henryk Greniewski) らの努力によって、ポーランドの社会科学の中で一定の役割と比重を占めるようになって行くのである。そこには、ポーランドにおける若干の思想史的状况ないしはイデオロギー状況とでもいうべきものが大きく作用している。そして、このことを理解することは、今日、ポーランドおよび東ヨーロッパの社会科学においてプラクシオロジーが占めている機能と役割を理解するうえに設立つだろう。

われわれは上の筋道を念頭においた上で、まず、**コタルビンスキ**の基本的な理論的立場、**コタルビンスキ**にたいするポーランド思想界の関係、**コタルビンスキ**のプラクシオロジーの概要などを順次みてゆこう。

III

コタルビンスキは1888年ワルシャワで生まれた。はじめ、ドイツで建築を学んだが、途中でやめて、1907年から、**トワルドフスキ** (Kazimierz Twardowski, 1086-1938) のいる **Lwów** 大学において哲学を学んだ。**トワルドフスキ**は、ウィーンにおいて**ブレンターノ**に学んだ分析哲学者であり、**ルカシェヴィッツ** (Jan Lukasiewicz, 1878-1956) などとともに、いわゆる分析哲学における **Lwów-Warsaw** 学派の指導者となった人である。

コタルビンスキは、**トワルドフスキ**や**ルカシェヴィッツ**よりはすこしおくれて、1912年『ミルおよびスペンサーの倫理学における功利主義』という学位論文を発表したのち、活動に入った。

コタルビンスキは1918年から1957年の間、ワルシャワ大学で哲学を教えた。1957年から1964年まで、かれはポーランド科学アカデミーの会長 (the President) に就いた。またかれは、ベルグラード、ブラッセル、ケンブリッジ、ロンドン、マンチエスター、パリ、ストックホルム、ウィーンの各大学や研究所、そしてペンシルヴァニア州立大学、カリフォルニア大バー

クレイ分校、これらの大学での客員教授として活躍した。

コタルビンスキの主要な文献をこの論文の末尾に添えている。それをみてもわかるが、コタルビンスキは、イギリスのラッセルに比べられるように数学的論理学にすぐれていたが、同時にまた実践の哲学的基礎といったことに関心がつよかった。Skolimowski [S-1] pp. 77-8.

まず明確にしておかねばならないことは、かれの理論的立場はマルクス主義ではないということである。

かれの哲学的、存在論的立場は、当初、reism といい、のちに concretism という呼称になるが根本の内容は変りはないとってよいだろう。reism というのは、“res (thing)” ということばから来ており、事物主義とでも訳せる。concretism は具体主義ということである。くわしい内容紹介や評価は、哲学の領域にかかわることでもある。ここではその概要をその主著『知識の理論、形式論理学、および科学方法論の基礎』（略して『基礎、とよばれる』）から簡単にみておこう。

reism とは、従来の伝統的な哲学的諸概念に意味論的分析 (semantic analysis) をほどこして得られる、ある種の唯物論的一元論 (materialistic monism) である。ややラフではあるが上述のようにいって大きなまちがいはないだろう。

要約すれば、reism は次のように主張する。[K-3] 英訳版 p. 430.

存在する (exist) のは事物 (things) だけであり、特性、関係、状態、事件等は存在しない。しかしこれらが存在するという幻想は、それらが文章の中で onomatoids=pseudo-names (擬名辞) としてあらわれるからである。

特性、関係、事件やそのほかの観念的対象の『存在“(existence)”』を拒否したのち、reism はその存在論的性格を明らかにする。

「ターム『事物』は、次の記述と同値のものとして解釈される。『時間および空間の中で位置し、一定の物理的特徴をもつ対象。』」（コタルビン

スキ) [K-3] p. 434.

すなわち、時間、空間の中で位置する物理的対象だけが「存在する」という、急進的実在論 (radical realism) (コタルビンスキ) としての具体主義があらわれる。[K-3] p. 81.

またその立場は pansomatism (汎実体主義) ともいわれ、肉体と精神の問題においても、二元的立場はとらない。魂、精神 (soul) の存在を否定はしないが、すべての soul は body (肉体) として存在していると主張する。[K-2] P. 127, [S-1] p. 98.

このようにみてくると、この具体主義の立場は、現代唯物論とは一致はしないが、しかし現代唯物論に——ややラフな意味で——かなり近いということもできる。(現代唯物論にあっては、意識をはなれても独立に存在する客観的諸関係は、実在しているとみる。)

コタルビンスキ自身は「具体主義と弁証法的唯物論との関係」についてつぎのようにいう。

「弁証法的唯物論は、すべての真理は具体的であると主張する。同時にそれは、認識は具体的なものから抽象的なものへと進み、抽象的なものから具体的なものにもどるということをみとめているが、しかし、具体的対象だけが唯一の対象であるとか唯一の認識対象であるとか主張することは拒否している。そして、onomatoids (擬名辞) を消去するようなことはしない。つまり、われわれの意見では、具体主義は、真理は具体的であるという原則および認識過程の傾向に関するテーゼの一つの解釈を提供するものなのである。」(コタルビンスキ) [K-3] p. 437.

これは1958年におけるコタルビンスキの発言である。しかし、人はコタルビンスキが、自らの意見を曲げて弁証法的唯物論と調和しようとしたものとみてはならないだろう。コタルビンスキは、戦前から戦後にかけて、マルクス主義に敵対的ではなかったが、自分自身の立場とマルクス主義との相違についてはきびしく保持した。スコリモフスキのいうように、「現

実の社会主義陣営におけるマルクス主義哲学者によってしめされる限りでの主張は、コタルビンスキの好みからすれば、あまりにもソフィスティケーションが不足しており粗野であると映じたのだろう。」 Skolimowski [S-1]p. 112.

かつ、ここで、われわれは、ポーランドにおける戦後思想界の風土をみておかねばならない。

スコリモフスキによると、ポーランドにおける分析哲学とマルクス主義哲学の関係は1950年代以降をとれば、第1期1951～55年；第2期1955～58年；第3期1958年以降の3期に分かれる。第1期は、分析哲学との間になんまりはげしい論争がたたかわされる時期である。第2期は、政治的社会的動揺との関連においてマルクス主義哲学界の方に激動的かつ非体系的な形での修正がおきはじめの時期である。第3期は創造的マルクス主義という形で多くの理論があらわれてくる時期である。

こういった時期推移のなかで分析哲学への扱いも変わるわけであるが、しかし、これら3つの時期を通じて一貫して、分析哲学者がほぼ自由な発言を保障されていたことは特筆されるべきだろう。スコリモフスキは3つの理由をあげている。第1には、ポーランドの分析哲学者、たとえばコタルビンスキやアジュケヴィッツ (Kazimierz Ajdukiewicz) などがすでになんりの業績をあげ国際的評価を得ていたこともあって、これらの人々を無理に改宗させたり沈黙させたりすることが不可能に近かったことである。むしろ論争においても、マルクス主義哲学の方が防戦に立っているような印象をあたえる程度に、分析哲学者は「オープン、かつ自由に」(スコリモフスキ) 自分たちの見解を勇敢に防衛した。第2には、分析哲学の批判ということは、伝統的なマルクス主義哲学の「ステロタイプ化された批判のパタン」(スコリモフスキ) ではなかなかたち向かいにくかったことがあげられている。たとえば、そういった論争の空気的一端は、1953年の哲学思想誌におけるアジュケヴィッツの次のことばによくしめされている。

「私がとり扱った問題は、それらマルクス主義哲学者がかかわっている問題とは異なっていた。異なる問題は異なる方法を要求する。しかし、異なるということは必ずしも矛盾するということではないし、場合によっては同盟的に結びつくことさえあり得るだろう。私が唱えてきたことはしばしばある唯物論的ドクトリンから異なることがあった。しかしそれは唯物論と矛盾はしない。まったく異なった問題が考えられているのだ。」 Ajdukiewicz [A-1] p. 334; Skolimowski [S-1] p. 216.

そして、第3には、ポーランドにおいては「分析哲学者は、事実、迫害されなかった。非マルクス主義哲学を主張するからといって、だれ一人として刑を加えられたりしたものはいない。『観念論者、であるとみなされたからといって、生計の道を閉ざされた人もだれ一人いない』（スコリモフスキ）といった一定の政治的状況があった。これには多くの要因があるうし、ここではその要因に立ち入らない。ただ、たしかに事実、1950年代においてコタルビンスキは一貫してワルシャワ大学での主要な位置を占めた。またアジュケヴィッツもボズナン大学、ワルシャワ大学で哲学、論理学を講じた。これらが前述のことを端的に語っている。現象学者**インガルテン** (Roman Ingarden) は教職をやめさせられたが、翻訳の仕事に任じられた。多くのいわゆる非マルクス主義哲学者が教職につきつつあるいはそれから離れた人もふくめて、 Biblioteka klaszykow filozofii (Library of Philosophical Classics) の編集・翻訳にあたり多くの非マルクス主義哲学の文献が訳出された。Skolimowski [S-1] pp. 131~132. pp. 214~217.

上述のスコリモフスキのあげている3つの条件の評価については若干の異論もあり得よう。しかし、ポーランドにおいて——1950年代後半に入る前においても——分析哲学者がかなり自由な空気の中にいたことを否定することはできないだろう。そして、このような思想的風土の上にコタルビンスキのプラクシオロジーも生まれ育ち得たのだということを忘れてはな

るまい。

なぜなら、コタルビンスキのプラクシオロジーは、人間の行為に関してその社会的・歴史的條件を捨象しても存在するような目的手段間の抽象的機能的諸関連に注目するという主張であり、そのような形での理解にたいして偏見や抑圧がみられるような状況のもとでは育ち得ない理論であるからである。

IV

コタルビンスキのプラクシオロジーをその著書『有効な仕事についての研究』（1955年）から、要約してみよう。[K-4]

その著は、次の15章からなる。

- I プラクシオロジーの関心事。
- II 単純動作の概念。
- III 主体。自由刺戟。結果。産出。材料。
- IV 道具とかこい。やり方と手段。
- V 動作の可能性。
- VI 複合動作とその類型。
- XII 集団行為。
- VIII 行為のプラクシオロジー的な価値。
- XI 行為の経済化。
- X 行為の準備。
- XI 行為における道具利用。
- XII 協働の原理。
- XIII 斗争の技術。
- XIV 精神的活動。
- XV 技術改善における進歩の動学。

概要だけをみておこう。以下、原語タームは英訳版から紹介する。この英訳はコタルビンスキのグループによってチェックされている。さて、プラクシオロジーの主要関心事についてはこの論稿のはじめに紹介したようなことである。

すべての、仕事 (work)、活動 (activity) などとよばれるものは、いくつかの単純動作 (simple acts) に還元される。[K-4] p. 14. 以下この節ではとくにことわらぬ限り、参照ページは [K-4] 英語版から。

ある事象が、あるいはある事象の変化がもたらされる場合、因果系列は錯綜し、多くの原因が働らく。そこで、ある事象をおこす本質的な要素、という問題について若干の検討が行なわれる。その本質的な原因となる刺戟 (impulse) が、ある主体 (agent) によって、そしてその主体のデシジョンによってひきおこされた場合に、主体の動作 (act) が成立つ。pp. 15~19.

ここで、主体は必ずしも人間に限られる要はない。しかし、合理的活動の最高形態を組織しうるためには言語によるコミュニケーションが決定的に必要である。プラクシオロジーの分析がかかわる主要領域は、人間活動 (human activity) の領域に限られる。pp. 22.

状態変化としての結果 (result) についても、状態の置換的 (permutative) な変化のおきる場合と、固執的 (perseverative) な変化のおきる場合とに分ける。置換的とは初期状態と変るときで、これには建設的 (constructive) と破壊的 (destructive) とがある。前者は、ある特性がつけ加えられたときであり、後者はある特性がとり去られたときである。また、固執的とは初期状態と変らない状態になるときで、これには保存的 (preservative) と予防的 (preventive) とがある。前者はある特性が保有されたままであること、後者はある特性が保有されないままであることとなる。これら4つの分類はいずれも、ある特性についていわれ得るのであり条件的、相対的である。ある特性に関して建設的であり他の特性に関して

破壊的であるという変化はしばしばみられるからである。また、コタルビンスキは、ある状態がそのままつづくのを static, ある状態から変動するのを kinetic とする。ある状態から動いて再びもとの状態にもどるのも kinetic に入る。結果は、上述の分類の組み合わせによって、大きく 6 分類される。pp. 22~32.

コタルビンスキは、いわゆる道具 (instruments) と ‘かこい、(enclosure) を区別する。道具は、ある状態変化をひきおこすためのものであり、‘かこい、とは対象物の自由な運動を制限するためのものである。後者には箱とか容器とかが入る。これはつまらぬ論議のようにもみえるが、コタルビンスキはいわゆる動物は道具を使用せず単に ‘かこい、を使うことがあるだけだという見解にこの問題を結びつけている。pp. 33~38.

複合動作 (the compound acts) とは、単純動作が有機的に一体化されたものをさしている。この場合、主体は単一のこともあるし、また異なる主体間の協働の結果として複合動作の生まれることもある。

これら複雑な動作として、一般的に、単一の主体または主体の集団による行為 (活動 ; action) がある。コタルビンスキは、行為の若干の類型について語る中で、「計画」(planning) の概念などについて分析している。

また、「方法」(method) の概念について興味ある分析をしめしている。すなわち、ある主体があることを行なうにあたって、そのことがいかに行なわれるべきかのやり方 (way) について精確に知っているとき、そのやり方のことを方法という。そして、この「方法」ということは単に主体が意識的に行為するということだけでなく、主体がその行為に関してなんらかの意味で反復的に行為した経験をもつか、あるいはそのような経験にもとづくある種の ‘コピー、を得ている場合にのみいわれる。つまり、「方法」は「あることを行なう、意識的かつ反復的・通例的 (oft-used) やり方」のことである、とされる。このことは、人間活動のたえまない反復の中ではじめて人間活動に関する合法則性が生じ得るという問題についての

一般的・抽象的側面をとらえたものといえることができる。pp. 47~60.

集団行為 (collective action) については、肯定的協働 (positive co-operation) と否定的協働 (negative co-operation) とがあるとされている。その意味で、協働 (co-operation) はひろくとられており、「2つの主体において、すくなくとも一方が他方を助けるかあるいはじゃまをしているとき、この2つの主体は協働している (co-operate) という。」(コタルビンスキ)。この場合、コタルビンスキは、G・H・ミードよりは客観的 (objective) な解釈に立つといっている。つまり主体の主観的意図よりも客観的な結果においてみるというニュアンスが濃い。ただし、主観的意図にもとづく観察を否定はしていない。ここにいわれている否定的協働は、いわゆる斗争 (conflict) や競励 (rivalry) をふくんでいる。斗争はドイツ語の Konkurrenz にあたり、競励はドイツ語の Wetteifer にあたるものである。また、一定の協同的作業において、ある面では肯定的協働になりある面では否定的協働になることがあり得るとされる。

また、肯定的協働において不可欠のものは、各主体間の行動の相互調整 (co-ordination) であり、また行動の相互調整のために必要となるところの計画である。そこで集団行為の全体について各主体間の間にコミュニケーションがあることが必須の要件となる。ここから、コタルビンスキは、協働における計画、指導性 (leadership)、コミュニケーションの問題を重視し、グループ構造における「有機的構造の度合、(the degree of organic structure) について検討している。そして、かれは、“organized group” としての組織 (organization) は、1つの organic group であるとしている。組織、集団における organic な特性は、①全体としての行動における目的の共通性、②各部分主体が意識すると否とにかかわらず各部分主体の行為がその全体目的に反することが少ないこと、③各部分主体が意識すると否とにかかわらず各部分主体の行為がその全体目的達成にとってマイナスの負担になるようなことが少ないこと、などによって特性づけら

れ、この特性がつよいほど有機的性格 (the organic nature) の度合は大きいとされる。これと関連して、協働の原理における重要なものとして、集団における共同目的に向っての集中 (concentration) の問題、また指導者と全体の間での指令、報告の情報ループの問題を論じる。また、集中からもたらされる集中化 (centralization) について、各グループメンバーのモチベーションそのほかの観点からの、マイナスのメリットが生じ得るという条件についても検討している。コタルビンスキはこのことを「集中化の二律背反 (the antinomy of centralization)」とよんで、第1には、指令の画一性の問題、第2には組織の分解の可能性の問題などをあげて論及している。pp. 61~74, pp. 133~157.

行為の経済化 (economization) という問題は、いわゆる行為における有効性 (effectiveness) という、プラクシオロジーにおける基本問題にかかわっている。

コタルビンスキはつぎのようにいう。

「プラクシオロジーの骨格を形づくる、有効な行為への指示をみよう。この問題は4つの側面に分かれる。……第1には行為の経済化という観点に立つ示唆が問題になる。これは行為をより費用節約的 (cost-saving) またはより生産的 (productive) にすることである。次に、行為の周到的準備 (preparation) のさまざまな形態が問題になる。第三には、行為における道具利用 (the instrumentalization of action) の重要性が討議される。このことは、道具および装置 (apparatus) 一般の、増大した規模での、さまざまな使用法をつくり出すことの中に存在している。最後に、組織化 (organization) の問題がわれわれの注意の焦点となる。それはさまざまな要素を単一の複合動作に統合することであるが、そこではとくに多くの主体によって逐行される複合動作が問題となろう。」(コタルビンスキ) p. 95.

上述の4つは、コタルビンスキ自身もいうように、かなり入りくんで互

いに関連している。

行為の経済化においてコタンビンスキはいくつかのことをあげ、検討している。

まずとりあげられているのは、干渉の最小化または純粹監督の原理である。ここにかれが干渉 (inter-vention) といっているのは、ある事態の発展にたいして外部からある一定の行為をあたえて事態のコースを変えさせることをさしている。人間の仕事を機械による仕事におきかえるのも、干渉の最小化の1例である。また、行為の潜在化 (potentialization) もあげられる。これは、行為を現実に顕在化しない形で所期の目的の若干を果すようなことをさしている。これにはいろいろな例がある。たとえば、貨幣や小切手の使用、あるいはモデル実験などもこの潜在化の例になる。また、行為の内在化 (immanentization) も、経済化の方法としてとりあげられている。いわゆる外的行動をするかわりに、これを観察や反省でおきかえることでありある種の思考実験のようなものをさしている。このような考え方から、計画化 (planning) もこの内在化に関連させられている。そして、この計画化は、行為の準備という問題にもつながってゆく。pp. 95～124.

また、行為における道具利用では行為における操作可能性 (operative-ness) や、また道具の標準化 (standardization) について説いている。pp. 125～132.

また、行為の経済化において、コタルビンスキは、イニシアティーフ (initiative) ——かれはまたこれを企て (enterprise) とよぶ——を重視する。イニシアティーフとは、行為に自発的に着手することを意味する。自発性とは、指令により強制されることや勧告によりすすめられることなく行為することを意味する。コタルビンスキは、このことに関連して次のようにいう。

「社会主義経済はいわゆる『私的企業』を推進しないとしても、このこ

とはなんら企業＝企て (enterprise) そのものに反対することをふくんではいない。重要なのはその行為の方向である。問題点は、個々人が主として自分自身の所得の最大化のために利潤を得ることや、他の人の仕事から利潤を得るということにのみ、かかわるのはよくないということである。すべての人々の能力は共同の幸福のために向けられるべきであり、したがって人々はその社会的機能の観点から、さまざまな改善に向って企て (enterprise) を実施すべきなのである。」 p. 97.

すなわち、社会主義経済にあっても、自発的な姿勢による進取的活動が推進されるべきであり、指令や勧告にのみ頼る経済システムを採るべきでない、ということ、コタルビンスキが1955年において示唆していることは興味深い事実であるといえよう。

なお、重要なのは、行為のプラクシオロジカルな価値について論じている部分である。pp. 75～94.

まず、行為の `有効性、(effectiveness)、`逆効果、(counter-effectiveness)、`無関係、(indifference) について論じられる。そして、有効性は合目的性 (purposiveness) に、逆効果は反目的性 (counter-purposiveness) に結びつけられる。無関係とは、非目的性 (non-purposive) であるが、反目的的 (counter-purposive) ではないとされる。また、有効性と逆効果はいずれもその `度合、(degree) をもつことが強調される。

有効性は、また、合理性 (rationality) とも関係づけられる。というよりも、かれは、ほぼ、有効性と合理性を同一視しているとみてよいだろう。かれは、別のところでは、`有効な行為、と `合理的な行為、を完全に等置している。[K-6] p. 303.

ところで、かれは、行為の合理性に関して、方法論的合理性 (methodological rationality) と事理的合理性 (factual rationality) とを区別している。事理的合理性とは、行為主体がその行為の環境や対象に関してもつ知識 (情報の蓄積) が現実を正当に反映しており、その行為のやり方が

合理的であり、行為が目的達成に有効であるときにいわれる。これにたいして、方法論的合理性は行為主体がもっている客観的状况に関する知識が事態の客観的真実と一致するかどうかはさしあたり問題とせず、その知識の枠内では（つまりその知識が行為を導くに正しくかつ十分なものと前提した場合には）ある行為が合理的であるとみなされるときにいわれる。

したがって、コタルビンスキのいうように、ある主体が自分の当面する問題や状況に関して妥当な情報をもっていないと、事実上の非合理性(non rationality in the factual sence) があらわれる。また、妥当な情報をもっていながらこれを無視したり利用しないと、これは方法論的な非合理性となってあらわれる。妥当かつ有効な情報を入手し得る条件があるときにこれを入手しないのも、方法論的非合理性である。

コタルビンスキは、行為の現実的な非有効性、失敗を、実践的誤り(practical error) ともいう。そこで、「われわれの知識における欠如からすれば、われわれはつねに、合理的な実践的誤り (rational practical error) に直面している。すなわち、われわれはつねに方法論的ないみで合理的であり得る。」(p. 89) ともいっている。

このような叙述からして、コタルビンスキが行為の合理性に関していうとき、その研究は方法論的合理性に限られるという方向を内包している傾向も濃い。しかし、かれ自身の著作や論文ではこの点は必ずしも明確に限定されていない、といわねばならない。

このように、コタルビンスキのプラクシオロジーは、人間の合理的行為に関連して生じる一般的諸概念の定式化のための努力であり、これを通じて、合理的な人間活動においてあらわれるべき一定のルールについて明確にしようとする努力である、といえよう。その具体的あり方としては、論理学および科学方法論の領域における研究としてあらわれているといってよいだろう。

V

ところで、このコタルビンスキによるプラクシオロジー概念について、これに、ヨリ限定された規定をあたえるとともに、同時にそのことによってこのプラクシオロジー概念をヨリ広い領域に連れ出したのが、オスカー・ランゲである。

ランゲは、コタルビンスキがプラクシオロジーを「有効な行為の一般理論」と規定したことを批判した。ランゲはほぼつぎのようにいう。

行為の有効性はつねに現実的有效性として存在する。したがって、その問題は、事理的合理性の問題となる。ところで、この事理的合理性の問題は、行為が立脚している知識の妥当性の問題でもあり、その行為が属する（あるいはその行為が考察される）領域における客観的な合法則性とこれについての認識の問題でもある。したがって、この事理的合理性は、その各領域においてあらわれる合法則性についての研究にも基礎づけられなければならない。これらにたいして、プラクシオロジーは、行為の有効性一般には関連するのであるが、「合理的行為のすべての領域に共通するものを解明する」ものとして、「方法論的合理性という意味での、合理的行為の一般的研究」として規定される。それは、行動の様式 (a mode of behaviour) として抽象された行為の一般的特質・機能的特質を研究するものである。

Lange [L-1] pp. 158~159; pp. 188~190. 邦訳 163, 193ページ。

このように、プラクシオロジーは、方法論的合理性としての行為の合理性を対象とすることによって、方法論的合理性としての行為の合理性が問題となる場合にはその行為がどの領域の行為であろうと有効な科学として役立つことになるのである。このような意味あいにおいて、プラクシオロジーは、経済学にたいしてもその補助科学としての性格を取得するのである。それは、論理学、数学、統計学一般などが経済学にとって補助科学として有効であるのと同様である。またその限りで、プラクシオロジーは経

経済学にとってかなり広い有効性をもつ補助科学としてあらわれるのである。

このことは、主として2つの面においてあらわれ得る。一つには、現実には展開される経済行為の連鎖と相互作用としての経済現象を分析する際に、「経済活動が合理的活動であるところでは、プラクシオロジー的行動原理は経済法則の一部を形成する」（ランゲ）ことになるから、プラクシオロジー的考察は経済現象分析に一定の役割を果すのである。いま一つは、現実の経済行為——たとえば社会主義において国民経済計画を有効に組織しようとする際、プラクシオロジーを利用することにより社会的生産および分配過程の社会的合理性（social rationality）を増大させるための強力な用具となり得る。〔L-1〕 p. 200；p. 206, 邦訳 206, 212ページ。

上述がランゲの指摘である。

プラクシオロジーを上述のように理解するならば、プラクシオロジーは、論理学、数学、統計学等と似た意味で、経済学にとりある種の方法科学的意味をもってあらわれる。このような理解において、ランゲは、新しく発展してきたプログラミング論等をふくむところのオペレーションズ・リサーチやサイバネティクス等の分析装置を、一定の論理学的研究とともにプラクシオロジーとして概括し、これら全体を経済学の補助科学として活用することを主張したのである。

それは、旧来のマルクス主義経済学者が硬直した概念図式の中でいわゆる公式をくり返して教条主義におちいる傾向をもちやすく、経済現象の操作理論的分析と本質的分析とを結合することに欠けやすい点への克服策として重要な理論的意味をもった。同時に、そのことは、社会的生産諸力の発展の中でますます具体的かつ複雑な経済計画の立案と実施をせまられてきた社会主義計画経済の実践的要請にたいして経済科学がこたえねばならないという現実を反映していたのであるといえよう。

ここで若干の補足を加えよう。ランゲはしばしば、プログラミング論と

ORとを並置して述べているが本稿では以下、プログラミング論をORにふくめて述べる。また、ランゲは、ある箇所では、OR（プログラミング論をふくめて）のみをプラクシオロジーに入れ、サイバネティクスについては——プラクシオロジーの1部門である情報理論に結びついているが——プラクシオロジーの補助科学であるとしている。しかしまた、別の箇所では、明らかにサイバネティクスをプラクシオロジーにふくめている。ここでは、サイバネティクスもプラクシオロジーにふくめるものとして論をすすめる。この問題については本稿の末尾において若干ふれることにする。[L-1] P. 193; p. 263. 邦訳 198, 25 ページ。

ところで、プラクシオロジーを、上述においてランゲが指摘したような、行為の方法論的合理性の科学として理解するならば、経済活動が方法論的に合理的であるような条件のもとでは、人間行動の経済法則は行動のプラクシオロジー的原則を特定の条件に適応させて具体化したものとしての側面をともなっている。しかし、このことは、プラクシオロジー的行動原則が、経済現象の構成部分である経済行為の方法的基礎の一部を提供し、その限りにおいて、プラクシオロジー的行動原則にかかわる若干の法則が経済過程の法則の一部を形づくるという意味である。単に、経済法則の基礎づけがプラクシオロジーの原則に還元されるということではない。

この点に関してはコタルビンスキの見解は、スルツキの見解に似て、ややあいまいである。

スルツキは、その論文「経済学の形式的＝プラクシオロジー的基礎づけに関する一試論」で、——コタルビンスキの紹介によると——、次のような見解をとった。

経済学の諸概念はヨリ一般的な科学であるところのプラクシオロジーの諸概念に基礎づけられる。プラクシオロジーは、有効な行為の理論である。そしてプラクシオロジーの諸概念は、さらにもっとも一般的な理論的

思考の領域、すなわち複雑な対象の構造と変化を扱う理論の諸概念に基礎づけられる。もし、このもっとも一般的な理論の領域を本体論 (ontology) とよぶなら、われわれは三つのレベルの構造をもつ。本体論はもっとも低いレベル、プラクシオロジーはまん中のレベル、経済学はもっとも高いレベルというわけである。高いレベルに上がるほどより具体的になり主題はより誘導的・派生的となる。低いレベルになるにつれて、より一般的となり主題もより基礎的となる。経済活動は人間活動についてのある特定例であり、人間活動は、ある対象の変化の過程の特定例であるといえよう。

これがスルツキの見解の要約である。ここには、構造と変化の概念から活動の概念にいたるといった、かなり示唆的な着眼点もあるが、しかしプラクシオロジーを包括的・全般的な行動理論として、これにより経済学の根本原理は説明されるといった理解がある。[K-6] p. 303. [S-2]。

コタルビンスキが次のようにいうとき、上述と似た傾向があらわれるとあってよいだろう。

「経済学はプラクシオロジーにゆたかな半製品、いはばプラクシオロジーが仕上げを行なうべき半製品を提供する。……プラクシオロジーは、経済学が自分自身の概念を明確なものにすることを救ける。……経済学のプラクシオロジーへの寄与はより多く事実的な性格のものであり、プラクシオロジーの経済学への寄与は体系構成的な性格 (a systematizing nature) のものである」 [K-6] p. 311.

これら、スルツキやコタルビンスキがここにしめた見解の方向を、もし単純に延長するなら、プラクシオロジーは経済学にたいして万能の包括的・全般的な理論的基礎をあたえるものとなり、経済学はプラクシオロジーに還元されるという見解にもいたり得る。このような極端な見解を明確に主張したのはフォン・ミーゼスである。

ミーゼスは次のようにいう。

「経済学は、より一般的な科学であるプラクシオロジーの一部——もっ

ともよく究明された一部ではあるが——になっている」 von Mises [M-4] p. 3.

このような見解はあきらかにあやまっている。それを、ランゲは詳細に論じた。それはかれの著『政治経済学』の第6章において論じられている。その詳細についてここにくり返す要はないが、要点は、経済活動が方法論的に合理的であるような条件のもとでは、行動のプラクシオロジーの原則がその経済行動の構成原則の一つになっている限りにおいて、プラクシオロジーが経済行動の連鎖の理解に役立つ、ということであり、それ以上でも以下でもないということである。それは、経済現象が一定の数量的関係であらわれ経済行動が一定の数量的関連に深い関係をもつとき、その経済現象の理解において数学が役立つという関係に似た関係であり、それ以上でも以下でもない。経済学がプラクシオロジーの一部に還元され得ないということは、経済学が数学の一部に還元され得ないのと同様である。

ここで、われわれは、ランゲが、プラクシオロジーと経済学的方法的結合について説明する際、次のように述べた点を注目しよう。

「プラクシオロジー……の意味は、政治経済学のいくつかの法則がプラクシオロジー的行動原則から……演繹的にみちびき出されるという点にある。こうして、政治経済学のなかで演繹的推論を利用する部分……はいちぢるしく拡大される。」 [L-1] p. 206. 邦訳 206ページ。

すなわち、ランゲのいう意味は、いくつかのプラクシオロジー的行動原則、たとえばプログラミング論に特有な計算方法などの論理的・数学的帰結がモデル構成に適用される推理の指針となることにおいて、演繹的推理のシステムとしての論理的・数学的モデルの適用が拡大するということの意味しているのである。

したがって、科学方法論上の問題としては、プラクシオロジカルなモデル構成が経済学にたいしてもっている関係は、論理的・数学的モデル一般が経済学研究においてもっている役割の問題の上にある。その有効性につ

いてはもはやここでいう要もないだろう。ただここで指摘しておいた方がよいと思われるのは、次の点である。飯尾 [I-1], [I-2]。

すなわち、どのようなものであれ、演繹的推論によるモデル分析を行なおうとするところの論理的・数学的モデルは、モデルとオリジナル（原対象）との対応関係において構成される。したがって、モデル構成の出発点にあたって、オリジナルについてあらかじめなにごともわかっていないというのではモデルの方法の立てようがないのであって、オリジナルとモデルとの対応が確定されるためには、オリジナルとモデルとの双方について、たとえば両者のそれぞれの構成、諸要素の機能、それぞれの諸過程等々に関する、なんらかの特定の知識がすでにあることが前提される。これを、オリジナルに即していうと、オリジナルについての一次的知識あるいは一次的記述ということができる。ところで、モデルはオリジナルをなんらかの抽象において反映するものである以上、問題は、オリジナルの一次的記述からモデルへの抽象化にいたる過程が考究目的に沿って本質的に行なわれたかどうかにかかってくるのである。

ところで、そのようなものとしての、オリジナルの一次的記述（把握）、そして本質的抽象を考究目的に沿って行なってゆく過程それ自体は、その時点で採用しようとするモデルの方法およびその演繹体系から生まれてこないのは自明である。

すなわち、ある時点で論理的・数学的モデルの方法をとろうとするとき、認識主体がオリジナルをすでにどのようなものとして一次的に把握しているか、またその考究目的に沿ってオリジナルのどの面を抽象しようとするか。これらの問題は、その抽象された側面について1対1または多対1の対応モデルを構成することに先行する条件であり、モデリングの中で自動的に解決されるのではない。

したがって、一定のプラクシオロジー的行動原則に立ったモデル構成を行なう際、その原対象となっている経済過程について一次的にどのような

ものとして把えるか、また原対象のどの面をどのように抽象するかということは、認識主体すなわちモデル構成しようとする人がそこで採用しようとしているプラクシオロジー的諸原則に関する知識からは自動的に生まれ得ないのである。

したがって、ある経済過程について、プラクシオロジカルな原則をとり入れたモデル構成をしようとする際に、前提的かつ決定的に重要であるのは、それまでの・多くの方法で（その方法の中には、すでに実践的に検証されたプラクシオロジカル・モデルの方法が媒介に入ってくることは十分にあり得る）、歴史的・実践的・理論的に検証されているところの、オリジナルについての基本的認識である。すなわち、社会経済過程をあつかう限りにおいて、一定の歴史的認識と実践によって定立されているところの歴史法則的な範疇認識が決定的に重要な契機としてあらわれるのである。

プラクシオロジー的な論理性は、すでにみたように、方法論的合理性に立つ論理性である。政治経済学における合法則性は、事実的合理性につながる合法則性として考究されねばならない。前者を後者に媒介するためには、政治経済学的過程に特有の歴史法則的認識、ヨリ煮つめていうならば、歴史的にあたえられたところの社会的制度的諸条件のもとにおける諸範疇への認識が不可欠となるのである。

VI

若干のことを付け加えて終ろう。

前節の最後にのべたような問題、プラクシオロジーと政治経済学の関連を端的にしめすような事例を、われわれは多くあげることができるだろう。ここでは、尾上久雄氏の「営利企業と社会的費用」（1970年）にみられる、その明確な一例に言及しておこう。尾上〔O-1〕。

ランゲは、その論文「生産における量的諸関係」（1966年）で、ある一定のアクティヴィティ選択に関するプラクシオロジカルな分析をしめし

た。Langea [L-3]。そこでしめされた「行動のある一定のプラクシオロジー的ルール」(ランゲ)は、ある一定の条件のもとに、防潮堤投資にかかわる被害防止コスト=建設コストと、一定の建設を行ない被害をうけたときの復旧コストとの関連における、行動選択のモデルに適用することができる。しかし、そのままではそこにあらわれるものは歴史的にあたえられた制度にかかわりなく、人間の方法論的合理性に立つような行動の論理をしめしている。このような、防止と復元にかかわるプラクシオロジー的ルールは、現実の営利企業体制においてはそのままの形では姿をあらわさない。それは特殊な形をとってあらわれ、その結果、「社会的費用」が発生することになる。これが政治経済学的結論としてあらわれる。この点を、尾上久雄教授は、明確なモデル分析の中で、きわめて具体的な形でしめすことに成功している。

このように、前節に述べたプラクシオロジーと政治経済学との関連は、単なる思弁の問題として存在しているのではなく、すぐれて現実の問題として、また現実分析の問題として存在しているのである。

また、前節で触れたサイバネティクスとプラクシオロジーの関連について簡単に述べておこう。もともと、サイバネティクスはまだ新しい分野でありその理論的体系的基礎やその体系的外延が十分にさだまっているようなものではない。したがって、この問題についても、われわれは一、二のことをかなり仮定的な形でいうことができるにすぎない。

サイバネティクスはその一般システム理論としての性格から、それぞれの対象の固有領域がもつある一定の特質を捨象する限りにおいて、問題対象の抽象的構造の特質に注目するものである。したがって、サイバネティクスの論理性は、それを社会的過程の分析に適用した場合、オスカー・ランゲのいうところの方法論的合理性に立つものとしてのプラクシオロジカルなものに属する性格をもっている。ランゲが、その著『全体と発展』(1962年)において、サイバネティクスを、事態の「方法論的構造をとらえる

分析装置、と規定したのも上述のことに関連している。また、前節で触れたように、ランゲが、ある箇所ではサイバネティクスをプラクシオロジーの一部門としているのも、上述のことと関連しているとみてよいだろう。

ただ、サイバネティクスは、機械—生物（脳）—人間（社会）におけるきわめて多くの興味深い、示唆的な相似、（ロス・アシュビー）をみつけようといった一つの指向性をもっている。サイバネティクスは、この点においては、ランゲも示唆したように無機的世界—有機的世界—人間的世界について統一した全体像を打ち立てようとする内容的な性格をもっているものであって、単にORと同様の方法的科学とみてしまうことができない性格をもっている。さらにまた、プラクシオロジーは主として人間行為を対象として論じるものであるのに対して、サイバネティクスがより広い対象領域をもつといえないこともない。これらの点が重要視された場合には、サイバネティクスをプラクシオロジーの補助科学という形でとらえ、「人間活動の一定の問題の研究にサイバネティクスの研究成果を適用する」（ランゲ）意味において、プラクシオロジーがサイバネティクスを利用する、という関連としてとらえることもできるのである。

ただ、上述のいずれの見方をとるにせよ、社会経済過程の研究においてサイバネティクスの分析装置が利用された場合、そこにあらわれる一定の研究成果は、プラクシオロジカルな性格をもつものにつながる。したがって、そこに歴史法則的範疇認識を十分に結合することなくしては、真の経済科学の道具たり得ないことは、明らかなのである。なお、この点についてのより詳しい見解は、私の著書などにおいても述べているので省略する。Ashby [A-2] p. 4, 邦訳 6 ページ; Lange [L-2] SS. 170~172; [L-1] p. 193, 邦訳 200 ページ; p. 263, 邦訳 253 ページ; 飯尾 [I-1] この問題については全巻でしめされているが、とくに序章, 第 2 章, 第 9 章; [I-2]。

文 献

直接に参照しないものについても文中であらわれた文献についてはすべて収録した。直接に参照したものは、* 印を付したものだけである。

[A—1] Ajdukiewicz, K.; 'W sprawie artykuła Profesora Schffa o moich poglądach filozoficznych' (私の哲学的見解についてのシャフ教授の論文に関して), *Mysl Filoz.*, 2 (8), 1953, p. 334; ([S—1]p. 216, から)。

*[A—2] Ashby, Ross; *An Introduction to Cybernetics*, London, 1961. 銀林浩ほか訳「サイバネティクス入門」宇野書店, 1967.

[B—1] Bogdanov, A.; *Allgemeine Organisationslehre*, Leipzig, 1924, 1928. ([K—4] から)。

[B—2] Bourdeau, Louis; *Theorie des sciences. Plan de science integrale*, Vols. I—II, Paris, 1882; ([S—1] p. 117 から)。

[D—1] Dunoyer, Charles. B.; *De la liberte du travail, ou simple expose des conditions dans lesquelles les forces humaines s'exercent avec le plus de puissance*, Vols I—III, Paris, 1845; ([S—1]p. 117 から)。

[E—1] Espinas, Alfred Victor; *Les Origines de la technologie*, Paris, 1897; (K—4] から)。

[K—1] Kotarbinski, T.; *Wybor pism. Mysli o dzialaniu* (選集, 行為について) Vol. I, PWN, 1967.

[K—2] *Idem*; *Wybor pism. Mysli o mysleniu* (選集, 思考について) Vol. II, PWN, 1957.

*[K—3] *Idem*; *Elementy teorii poznania, logiki formalnej i metodologii nauk*, (1st ed., 1929), 2nd edn., W—W—K: Ossolineum, 1961; (English) *Gnosiology, The Elements of the Theory of Knowledge, Formal Logic and the Methodology of the Sciences*, Oxford, 1966.

- *[K—4] *Idem*; *Traktat o dobrej robocie (A Treatise on Good Work)*, 1st edn., Lodz: Lodzkie Towarzystwo Naukowe, 1955; Warszawa: Ossolineum, 1965 (3rd edn.). (English) *Praxiology—an Introduction to the Science of Efficient Action*, Oxford, 1965.
- *[K—5] *Idem*; 'The Concept of Action', *The Journal of Philosophy*, 57, March 1960.
- *[K—6] *Idem*; 'Praxiology and Economics,' *On Political Economy and Econometrics, Essays in Honour of Oskar Lange*, Warszawa, 1964, pp. 303~312.
- *[L—1] Lange, O.; *Political Economy*, Vol. I, P. W. N., 1963, 竹浪祥一郎訳「政治経済学」合同出版, 1964年.
- *[L—2] *Idem*; *Calosci rozwoj w swietle cybernetyki*, (サイバネティクスの見方からみた全体と発展), P. W. N., 1962: 鶴岡重成訳「システムの一般理論」合同出版, 1967年.
- *[L—3] *Idem*; 'Quantitative Relations in Production', *Problems of Economic Dynamics and Planning, Essays in Honour of Michael Kalecki*, 1966, pp. 233~269.
- [M—1] Martin, Melton; *Le Travail humain, son analyse, ses lois, son evolution*, Paris, 1878. ([S—1] p. 117 から)。
- [M—2] Mercier, Charles Arthur; *Conduct and its Disorders Biologically Considered*, London, 1811. ([S—1] p. 117 から)。
- *[M—3] Mead, George Herbert; *The Philosophy of the Act*, 3rd ed., Chicago, 1950.
- *[M—4] von Mises, Ludwig; *Human Action, A Treatise on Economics*, New Haven, 1950.
- *[O—1] Onoe, Hisao; (尾上久雄)「社会的費用と営利企業」, 京都大学経済研究デ

イスカッション・ペーパー, KIER 7001, 1970 2 月.

*〔P—1〕 Parsons, T. et. als.; *Toward a General Theory of Action*, Cambridge (Mass.) 1954.

〔P—2〕 Petrovitch, Michel; *Mecanismes communs aux phenomenes disparates*, Paris, 1921, (〔K—4〕 から)。

*〔S—1〕 Skolimowski, Henryk; *Polish Analytical Philosophy*, London, 1967.

〔S—2〕 Slucki, Eugenius; *Ein Beitrag zur formal-prakseologischen Grundlegung der Oekonomik*, Kiev, *Zapiski socjalno-ekonomicnogo viddilu*, Ukrainska Akademia Nauk. (〔K—6〕 から)。

*〔I—1〕 Iio, K. (飯尾); 『市場と制御の経済理論』日本評論社, 1970年.

*〔I—2〕 *Idem* et. als., 「サイバネティクスと経済理論」(座談会および主要報告)『経済セミナー』1971年1月号所収。